

〔古典研究〕

「サルの人化における労働の関与」を読む（下） —— 内在的弁証法 ——

須藤 泰秀*

本シリーズのこの最終回は表題にあるエンゲルス草稿の理性、あるいは概念論に相当する部分の論述形式を開示します。ここでエンゲルスは、内容的に言えば、ヒトの身体進化の客観的な真なる姿を規定しこれの使命を説明しています。しかし、内在的弁証法の核心を成す理性ないし概念論に関しては、自称「弁証法的唯物論者」の解説は不十分な理解にしか立っていないものが多いので、本稿では大きな紙幅を割いて説かざるを得ませんでした。

キーワード：観察する理性、普遍的相互作用、合目的性、行為する理性、目的意識性、社会的に生活する理性、ヒトの未来

目次
序文

対象意識：客観的对象（ヒト化の在り方）を巡る意識

- 1 感性的確信
 - 2 知覚的認識
 - 3 悟性的認識
- （以上 37巻1号）

自己意識（ヒト化の本質）：意識そのものについての意識の自覚

- 1 自己確信の真相——自我と生命
 - 2 自己意識の自立性と非自立性；および支配者と隷従者
 - 3 自己意識の自由——自己意識の普遍性
- （以上 37巻3号）

（以下 本号）

理性的認識（ヒト化の概念）：理性の確信と真相

- 1 観察する理性
- 2 行為する理性
- 3 社会的に生活する理性

後記

理性的認識（ヒト化の概念）：理性の確信と真相

研究者意識における客観的对象についての意識と自己自身についての意識との最高の統一、言い換えれば対象意識と自己意識との統一、つまり絶対的な在り方たる研究者意識が理性である。理性は、理性の諸規定が我々自身の観念であるとともに、また対象的でもあるという確信である。理性は自己自身の確信、すなわち主観性であるとともに在り方、客観性でもあるが、ここではこれら両側面は或る種の同一思考の中にある。

1 観察する理性

我々科学者が理性の展開を通して本当に知り得る第一は内容が、我々一人ひとりが恣意的に作る我々のたんなる表象、すなわち観念の中にあるものではなく、対象のそれ自体で存在する

* 立命館大学産業社会学部教授

本質を意味するのであり、したがって客観的実在性を持つということである。

（1）我々科学者の主観的観察

研究者意識は既に自己が対象でもあることを確信しているが、この確信はここでは未だ主観性に止まっている。そこで仮説に基づく観察実験によって、その思い込みが客観性であるということを、抽象力を駆使しつつ証明せざるを得ない。

（訳18-1）**対象と方法** 既に暗示しておいたことではあるが、動物もヒトほどではないにせよ、やはりその活動によって外的自然を変化させる。 S.451.

論理的整理【概念そのもの】

自己運動するものそれ自体、つまり概念そのもの、観念的な具体的普遍は個性性、特殊性、普遍性の三契機を持つ¹⁾。

個性性（動物）は概念の自己への否定的反省である。いかなるものでも個性性という点では即かつ対自的に、すなわちそれ自体で絶対的に存在している。また諸々の規定は契機として個性性に内在している。

普遍性（ヒト）は概念の自己との肯定的な、排他的でない統一である。それは反対者を中に含むが、同時に反対者には何の関わりもなく、それによって規定されることなく止まっている。

特殊性、すなわち特殊な（その活動によって外的自然を変化させる）状態は個性性と普遍性との相互の関係である。それは或る規定に引き下げられた普遍である。あるいは逆に、普遍性に高められた個性性である。

それゆえ我々科学者は、ここではそれら

諸契機を認識過程の発展という一面性、つまり「形式論理学²⁾」において問題にするのである。

（2）自然の観察

研究者意識はあらゆる実在性であるという確信、観念論を抱いているがゆえにそれは現実の世界に足を踏み入れ最初に自然を観察する。

i 無機物に対する観察

自然界における単純な対象は無機物であるから、まず観察さるべきは無機物のような在り方である。

（訳18-2）**自然の普遍的相互作用** そして、動物がその環境に引き起こしたそうした変化は見てきた通り、その変化を引き起こしたものに反作用を及ぼしこれを変化させる。というわけは自然においては、バラバラに起こることなど何もないからだ。あらゆるものが他のものに作用を及ぼし、それから反作用を受ける。そして、我が自然研究者たちが最も単純な事物をさえ明解にし得ないのは、大概この全面的な運動と相互作用³⁾を忘れるためである。 id.

論理的整理【個別】

概念は個性性、特殊性、普遍性の三契機を持っているが、これらの規定が概念の諸契機（引き起こしたそうした変化）として互いに区別される。

またそれに対応して、異なった内容を持つ概念が（反作用を及ぼし）区別される。

普遍的なものの、特殊なものの、個別的なものについての概念という区別が生じるが、それら各々は普遍的相互連関（この全面的な運動と相互作用）においてしか理解することができない。

ii 生物に対する観察

世界は自己であるという理性としての研究者意識の根本は、世界の中に自己を見出すことであり、換言すれば変化や対立の中に不変的な自己同一性を、つまり世界の中に法則を発見することに外ならない。その自己同一性を基準にすれば、無機物より一段高い階層は生物である。

(訳18-3) **動物の環境変更は偶然事** 我々がさきほど見たように、ヤギはギリシアの森林再生を妨げている。セント・ヘレナ島では最初の渡航者が陸揚げしたヤギとブタが、この島の原生草木をほとんど全く根絶やしにしまい、こうして後からきた水夫や植民者の持ち込んだ植物が繁殖できる基盤を準備した。しかし、動物がその環境に長期に亙る何等かの作用を及ぼしたとしても、そのつもりなしにやることでこれら動物そのものにとってそれは偶然事⁴⁾。 id.

論理的整理【特殊】

普遍(我々)は特殊(森林再生)と個別(ヤギの妨害)とを自己の下に包摂する。

個別(ヤギとブタ)は特殊(この島の原生草木)や普遍(ほとんど全く根絶やしに)と同一の規定を持つだけでなく、それ以上に多くの規定を持つ(繁殖できる基盤を準備した)。

特殊(環境)の普遍(長期に亙る何等かの作用)に対する関係もまたこれと同様である。だから、普遍について妥当することは特殊と個別についても妥当する。また、特殊について妥当することは個別についても妥当する。しかし、その逆ではない(偶然事)。

iii 人間に対する観察

次に理性としての研究者意識は人間、自己意

識を観察することになるが、それは純粹=抽象から、現実=具体(個体)へという方向でなされる。

(訳18-4) **品種改良** ところが自然に対するヒトの作用は、ヒトが動物から遠ざかるに比例して一層前以って考え抜かれた、すなわち計画的な、すなわち前から分かっている特定の目標に向けられた行動という性格を帯びてゆくようになる。動物は或る地域の草木を根絶やしにしても、自分のやっていることが自分では分かっていない。ヒトが草木を根絶やしにするのはこの跡地に穀物を播くか樹木やブドウを植えるため、彼らはそのようにすれば播いた種子の何倍もがそれから得られると知っているからだ。ヒトは自分たちに役立つ植物や家畜を或る土地から他の土地へ移し、こうして諸大陸全体の植物相や動物の生活を変える。それだけではない。植物も動物も人為的に栽培され飼育され、ヒトの手で元の姿が分からないまでに品種改良されている。今日の穀物品種は原種に当たる野生植物は、探求中ではあるが未だに発見されていない。それ自体はなほは品種の多い今日のイヌ、やはり数多い今日のウマの品種が、どの野生動物の末裔であるかは未だに論争中なのである。 SS.451-2.

論理的整理【普遍】

同一の普遍(ヒト)の下にある特殊の諸規定(一層前以って考え抜かれた、すなわち計画的な、すなわち前から分かっている特定の目標に向けられた行動という性格)は、互いに同格である。

同様に、同一の個別(動物)の下にある特殊の諸規定(或る地域の草木)もまた同格だと言われる。

しかし、普遍の中で(人為的に)同格で

ある諸規定（品種）は、個別の中では同格
ではあり得ない（未だに論争中）。

（3）観察する理性のまとめ

ここで理性としての研究者意識は、以上に観察された様々な関係を順次的にまとめてゆく。

i 判断

対象はそれ自体が持つ客観的連関に従い、個別＝普遍という概念本来の連関によって区別されることになる。

（訳19-1）**計画性（合目的性）** ところで我々にはもちろん、動物にも計画的で前以って考え抜かれた行動様式に従う能力が備わっているということを否定するつもりは全くない。その逆である。原形質が、すなわち生きたタンパク質が現出し反応しているところでは、言い換えれば外からの確かな刺激の結果として、たとえどんなに単純なものであるにせよ明確な運動を行っているところでは、どこでも既に計画的な行動様式が萌芽として現出している。そうした反応は細胞さえまだ全く存立していないところでも起こり、いわんや何等かの神経細胞が存立しているところにおいてをや。食虫植物⁵⁾がその獲物を捕らえる遣り口も全く無自覚ではあるが、やはり或る点では計画的であるかのように思えてしまう⁶⁾。 S.452.

論理的整理【判断】

概念（我々）の中の諸契機が持つ絶対的統一は、判断において揚棄される。判断は概念の諸規定（動物：計画的で前以って考え抜かれた行動様式に従う能力）の連関である。というわけは、規定各々は同時にそれぞれ固有な規定、対自的に別々に存在している規定と見られ、したがって特殊的な

概念と見られるからである。

判断には三つの契機がある。(1)個別性あるいは特殊性の側面を表す主語（原形質が、すなわち生きたタンパク質が）。(2)普遍性の側面を表す述語（計画的な行動様式）。ただしこの普遍性は同時に特定の普遍性であり、言い換えると特殊性（萌芽）でもある。(3)述語の主語との単純な内容のない関係は繫辞（現出している）である。

判断の種類は種々の段階を表わす。すなわち、その段階を通して主語と述語との外面的な関係が、概念の内的関係にまで展開する。主語はまず最初、述語との直接的同一状態の（細胞さえまだ全く存立していない）形式である。ここでは主語と述語の内容規定性は同一である。しかし次に、両者は区別される。主語（食虫植物）は抽象的述語（その獲物を捕らえる遣り口も全く無自覚）よりも複雑（或る点では計画的）な内容を持つ。したがって主語は、形式上は述語に対して偶然的である。

ii 推理

次に理性としての研究者意識は判断論を、体系的な連関から成る認識論的な意味において推理の展開過程に整理する。

（訳19-2）**自覚的計画的行動能力の発達** 動物では自覚的かつ計画的に行動する能力は、神経系統の進化に比例して発達してきており哺乳動物では既に高いレベルに到達している。イギリスのキツネ狩りでは、キツネがその追跡者から逃れるため、土地に関する自分の深い知識をいかに正確に利用し得るか、またキツネが地の利を全てに互っていかによく知り尽くし、足跡を暗ますのに利用するかを人は毎日でも観察す

ることが可能。ヒトとの接触のおかげで高度な進化を遂げた今日の家畜では、ヒトの子供と全く同じ水準の狡猾な策略を人は毎日のように観察することができる。というわけは、母胎内におけるヒトの胎児の発生史が、我々の祖先の動物が蠕虫類から始まって何百万年にも亘って成し遂げてきた身体進化の歴史を短縮し繰り返したにすぎないように、ヒトの子供の精神的発達も同じその祖先、少なくともずっと時代の近い先祖の知的発達を一層短縮した形で繰り返したにすぎないからである⁷⁾。 id.

論理的整理【推理】

判断にあつて概念は、二つの規定が互に直接的に関係している。しかるに、推理は根拠を持った判断である。二つの規定(動物:自覚的かつ計画的に行動する能力)は推理においては、それらの統一である第三の規定(神経系統の進化)によって結合される。だから推理は概念の完成状態、すなわち完全に措定されたものである。

それら諸契機相互間における、規定された内容上の区別は揚棄された。このように推理の契機の区別がなくなった今、推理の関係として手元にあるものは外面的な悟性的同一性、つまり等しさである。これによる推理は量の推理、あるいは唯物論的な数学的推理(神経系統の進化に比例して発達し)である。すなわち、第三のもの(知識を……利用する)に等しい二つのもの(キツネ:追跡者)は互いに等しいという推理である。

普遍が媒介項(全く同じ水準の狡猾な策略)である推理は類推である。類推とは一般的規定から言えば、同じものの二つの主語(ヒトの胎児の発生史:ヒトの子供の精

神的発達)にあつては、一方の主語(発生史)に属する特殊の規定(歴史を短縮し繰り返した)は、他方の主語(精神的発達)にも属するという推理である。

iii まとめ

かくして、自己は対象と統一し得るようになる。

(訳19-3) **合目的性の限界** しかし動物ども全ての計画的行動は全てが、それらの意志の極印を大地に押すことはできなかった。そのためには、ヒトを待たねばならなかったのである⁸⁾。

id.

論理的整理【概念についてのまとめ】

媒介項は(計画的行動は全てが)それゆえ、普遍的領域としての主語(動物ども全て)が完全に特殊化したものである。したがってそこでは同時に、主語がこれら諸規定の一部を排除し、あるいは措定することが可能になる。

主語は普遍的なものとして、潜在的には多くの規定の可能性である。

そこで、主語(ヒト)のこの普遍性ないしは可能性(意志の極印)から、その規定性あるいは現実性(大地に押す)への移行が行われる。

(4) 我々科学者のまとめ

我々科学者はここで、観察する理性の全体についてまとめておくことにする。

(訳20) **目的意識(自発的自己批判能力)** 以上を要約しておく。動物は外的自然を利用するだけで専ら、現存していることでしか外的自然を変化させないのである。だがヒトは、自分が諸々の変化をすることによって自分以外の自然

を，自分の目的に奉仕させそれを支配するのである⁹⁾。そしてこのことが，他の動物からヒトを区別する最後の本質的な差異¹⁰⁾なのであって，この差異を生み出すものはまたもや労働なのである*。

*草稿の欄外に鉛筆で「推敲すること」と記入されている¹¹⁾。id.

論理的整理【目的意識への移行】

判断と推理とにおいて概念は，無媒介な実在性（利用）という形式をとる。すなわち，主語（動物）と述語（外的自然）は各々が独立な定存在（現存していることでは外的自然を変化させない）という形式をとる。

目的意識（ヒト）にあっては，結果（自分以外の自然）であるものが同時に無媒介に働く根拠（自分が諸々の変化をすること）である。根拠（自分の目的）は，元来が主観的なものとして外的定存在から分離されている。

そこで活動性（労働）が，主観的形式を客観性に橋渡しする。そしてこの移行によって，目的意識は同時にその概念（他の動物からヒトを区別する最後の本質的な差異）に帰るのである。

2 行為する理性

我々科学者が理性の展開を通して本当に知り得る第二は内容が，自我に対して決して外来的なものでなく，何ら与えられたものでなく，自我によって貫徹され，自我のものとして同化され，その意味でまた自我によって生産された内容，言わば絶対的観念論への内容だということである。

（1）我々科学者の主観的観察

研究者意識は対象として現示するだけでなく，むしろ機能としてしか存在しないから，我々科学者の観察にとってはさらに行為，すなわち理性的自己意識の自己実現が問題となる。

（訳21-1）**対象と方法** しかし我々は，我々ヒトが自然に対して得た勝利でありあまり自惚れないことにしよう。そのような勝利一つひとつに對し，自然は我々に報復する。勝利はいずれもが当初は我々の予定した成果をもたらしたとしても，二次的三次的には予想もしなかった全く別の作用を引き起こしてしまうので，このために最初の成果が帳消しにされてしまうこともしばしば¹²⁾。SS.452-3.

論理的整理【客観】

客観（自然）はまず第一に，概念そのものにおける個別と特殊と普遍，という区別に対する無関心性を通ることによって生まれた無媒介な在り方である。これは，区別が客観の中では揚棄されているもの（我々ヒトが自然に対して得た勝利）だからである。

客観は第二に，自己内で全体的な（我々に報復する）ものである。

そして同時に，客観は第三に，この全体性が諸契機の潜在的な同一性でしかない（二次的三次的には予想もしなかった全く別の作用を引き起こしてしまう）ので，かの無媒介な統一（最初の成果）に対しても無関心である。

それゆえ我々科学者は，それら諸契機の完全な自立性と，区別項の完全な非自立性との絶対的な矛盾を自己内反省するのである。

(2) 行為の観察

理性としての研究者意識は行為によって、現実における自己実現によって自己を見出す。

i 快楽と必然性

理性的自己意識も観察を通して発生した当初は、無媒介な感性状態でしかないから個別的な状態にある。その意識が行為を通して自己自身を実現しようとする、むしろ現実の方にこそ自己の本質があることに気づかされる。

(訳21-2) **外界支配の端緒** メソポタミア、ギリシア、小アジアその外で開墾地を得るため森林を根絶ぎにした人々は、それによってこれらの国々から森林と一緒に水の集合点と貯水池をも奪ってしまい、こうしてこれらの国々における今日の荒廃の土台を造ってしまったとは夢にも思わなかった。アルプス地方のイタリア人たちは、北側の山腹であれほど大切に保護されているモミの森林を南側の山腹で伐採し尽くした時、それによって彼らの地域における牧牛を全滅させてしまったとは気づかなかった。またそれによって一年の大半は涸涸の水がすっかり干上がり、雨季にはまた打って変わって荒れ狂う激流となり、平原に氾濫したとはなおさら気づかなかった。ヨーロッパにジャガイモを広めた人々はそのデンプン質の根茎と、これが病因の瘰癧をも広めたとは思ひもしなかった¹³⁾。こうして我々は一步ごとに、我々が自然を支配するのは征服者が他部族を支配するごとく¹⁴⁾、あるいは誰か自然の外に立っている者が行うごとく支配するのでは決してなく、むしろ我々は、肉と血と脳を以て自然の一部であり自然の真只中にいるのだということ、そして自然に対する我々の支配は我々が、他の生物は全てが不可能なことなのだが、自然法則を認識しこれを

正しく利用する可能性を持っている点に尽きるということどもを思い知らされるのである¹⁵⁾。

S.453.

論理的整理【目的意識性そのもの】

目的意識にあつては媒介されたもの、つまり帰結は、同時に無媒介なものであり最初のもので、かくして根拠である。すなわち目的意識(開墾地を得る)は帰結(開墾地)を根拠、目標として動く(森林を根絶ぎにした)。生産されたもの、あるいは媒介によって指定されたものは、生産すること、自己の直接的な規定とを前提として持っている。

また逆に生産する(伐採し尽くす。ジャガイモを広める)ことは、根拠である結果を、したがってそれ自体が活動性の第一の規定である結果を目指し、また結果によって動かされる。目的意識的な行為は、一種の推理である。

この推理において主観の形式の中にある一定の全体は、すなわち頭の中で主観が持つ一定の概念(我々が自然を支配する)は客観的形式と結合される。換言すれば、その概念は目的意識的な活動性との媒介によって、概念の実在性(自然法則)と結合される(認識しこれを正しく利用する)。この点で、概念は概念によって規定された或る実在性の根拠(可能性)なのである。

ii 心の法と自惚れの狂気

第二に理性的自己意識は、必然的なもの、普遍的なもの、あるいは法則を無媒介に自己の中に持つ。

(訳22) **自然支配の進展と終局** そして我々は実際、日ごとに自然法則を一層正しく会得す

ることを覚え、自然伝来の運動に我々が干渉することから生じる当面の成果と遠い成果とを認識することができるようになっていく。殊に今世紀に入って自然科学が長足の進歩を遂げてから我々は、少なくとも我々の最も日常的な生産行為に対し、その行為から起こる遠い自然的な諸成果までもを知り、したがってそれを益々支配できるようになってきている。しかしそうなればなるほどヒトは一層自分が自然と一体だ、と感じるだけでなく知ることになりましょう。そして、古典古代の没落以降ヨーロッパに広まりキリスト教において最高潮に達した、精神と物質との対立、ヒトと自然との対立、魂と肉体との対立、などといったような¹⁶⁾不合理な表象と不自然な表象は益々不可能になってきているのである¹⁷⁾。 id.

論理的整理【外的な目的意識性】

目的意識は何よりもまず無媒介なものであるが、この直接性においては外的な目的意識性であり、そこでは概念（我々）が、前提されている客観（自然法則）と対立している。

したがって目的意識は、内容面から見ると有限（自然伝来の運動に我々が干渉することから生じる当面の成果と遠い成果）であり、主観が眼前の（少なくとも我々の最も日常的な）客観に外的に条件付けられている限り目的意識の自己規定は形式面だけのものである。

かくして目的意識性は、目的意識の実在（精神、ヒト、魂）がその概念（物質、自然、肉体）に一致していない限り偶然的なもの（不合理な表象と不自然な表象）にしかならない。

iii 徳と世間の習い

最後に理性的自己意識は、普遍的だと思い込んでいる法則を徳として示し、この徳が世間でも行われることを要求する。

（訳23）**利益社会（あるいは普遍的）支配の可能性** しかし、生産に向けた我々の行為から起こる自然上の遠い諸成果に対してさえ、我々がそれを或る程度考慮に入れられるようになるまでに数千年¹⁸⁾の労働が必要だったとすれば、これら行為の利益社会的な遠い諸成果に対しそうするのは遥かに困難なことであった¹⁹⁾。我々はさきほどジャガイモのこと、またその後を追って瘰癧が広まったことに関して述べた。しかし労働者を、ジャガイモの常食状態に陥らせたことで国々中の人民大衆に窮状をもたらした影響に比べれば、また1887年にジャガイモ病〔と誤って呼ばれた瘰癧——訳者〕の結果アイルランドを襲った飢餓、ジャガイモを食べ、しかもほとんどジャガイモしか食べられなかったアイルランド人100万人をあの世に、200万人を海の彼方に追いやった飢餓に比べれば瘰癧ですらどうってということもないのではなからうか。アラビア人たちがアルコールの蒸留法を覚えた時、彼らはそれによって当時はまだ全く発見されていなかったアメリカのネイティブ・ピープルズを、この世から抹殺するための主要な道具の一つ〔＝蒸留酒——訳者〕を作り出したとは夢にも思わなんだ。またこの後コロンブスがそのアメリカを発見した時、彼はこのことによってヨーロッパではとくに克服された奴隷制を復活させ、黒人貿易の基礎を築いたとは知らなんだ。17世紀と18世紀に蒸気機関の発明に携わった人々も自分たちが、他のいずれにも成せないほど全世界の利益社会状態を革命するはずの道具を作り上げたとは、殊にヨ

ヨーロッパでは少数者の側に富を、膨大な多数者の側に無所有を集積させ、このことによってまずブルジョア階級に共生社会の支配と政治の支配とを与え、次いでブルジョア階級とプロレタリア階級との間に、ブルジョア階級の打倒と階級対立一切の廃止に終わる外ないような階級闘争を生み出すはずの道具を作り上げたとは知らなかった。しかしこの分野でも我々は、長くて時には厳しい経験を通して、また史料の収集と研究を通して、次第に我々の生産活動における利益社会上の間接的で遠い諸成果をも明確にさせることを覚え、これによって我々がそれら諸成果をも支配し規制する可能性が生まれているのである。SS.453-4.

論理的整理【内的な目的意識性】

自己の概念を自己自身の中に持つ場合、目的意識は内的な目的意識性である。

したがって目的意識そのものの中に、目的意識(自然上の遠い諸成果、利益社会的な遠い諸成果)と手段とが同時に存在している。

すなわち内的な目的意識は、実現される目的意識と実現された目的意識を自己自身で同時に併せ持つ(我々がそれら諸成果をも支配し規制する可能性が生まれている)。この目的意識こそは、現代科学的な意味での目的と言うべきものである。

3 社会的に生活する理性

かくして、理性の知識はたんなる主観的確信であるに止まらず真理でもある。というわけは、真理の本質は確信と存在との一致、すなわち確信と対象性との一致、というよりはむしろ統一状態にあるからなのである。

(1) 我々科学者の主観的観察

徳を備え、しかも世間の習いに背かないことが自覚されて、人間は初めて社会生活を営むことができるようになり、絶対的に自覚的な実在としての個性になる。

(訳24) **対象と方法** しかしこの規制を実現するには、たんなる認識以上のことが必要である²⁰⁾。そのためには我々の従来の生産様式を、それと同時に今日における我々の利益社会的秩序の総体をも完全に变革することが必要なのである。S.454.

論理的整理【理念】

理念は、概念と実在性との統一である。

すなわち理念は、概念が自己(たんなる認識以上のこと)と自己の実在性(たんなる認識)そのものを規定している限りでの概念(この規制)である。

換言すれば理念は、現実性(我々の従来の生産様式)が在るべき姿で存在しているがごとき、したがって自己の概念そのもの(我々の利益社会的秩序の総体をも完全に变革すること)を含んだ現実性である。

(2) 理性の自覚

理性的な個人の概念はどのような契機に分岐し、個人にどのように自覚されるのであろうか。

i 精神上の動物帝国とごまかし

個別は同時に普遍でもあるということを実感し始めたその精神、すなわち絶対知という本来的な精神への萌芽は最初のうちは社会、それも本源的自然のようなものと統一的に行為するから、この行為は環境と一体的な動物の生命維持活動と同じである。しかし、その行為は社会性

が怪しくなると万人がキツネのように、それは自己のためなのだと思いを全員でごまかし合う。

（訳25）**資本家の動機** これまでの生産様式は全てが、労働の一番近くて最も直接的な効果の達成しか眼中になかった。その将来的な、後になって初めて現れてくるような、漸次的な反復と累積によって効果を生じるような結果は一顧だにされなかった。土地の本源の共同所有は一方で、その視野が大体においてごく目先のことに限られているようなヒトの発達水準に対応していた。他方で裁量可能な一定の土地が余っていて、森林の本源のごとき²¹⁾その経済のうだつが上がらなくなった時、一定の抜け道の残されていることが前提となっていた。その余分な土地が尽き果てた時、共同所有も没落した。しかしより高い生産諸形式は全てが、種々異なった階級への住民の分離に導き、それとともに支配階級と被抑圧階級との対立に導いた。その結果、被抑圧者の極めて乏しい生計の支えにしかすぎない生産以外は支配階級の利益が生産の推進要素となった。このことが最も完全に実現されているのは現在のところ、西ヨーロッパで支配的な資本家流の生産様式においてである。生産と交換を支配している資本家たちは、彼らの行為の最も直接的な効用しか気に懸けない。それどころか、この効用でさえもが——生産または交換される物品の有用性に関する限り——全く二次の問題になっている。売却によって得られる利潤だけが、唯一の動機となっているのである。SS.454-5.

論理的整理【生命】

理念は、概念（これまでの生産様式全て）が自己の実在性（労働の一番近くて最も直接的な効果の達成）と無媒介に合一してい

て、

同時にその理念の中で自己を区別し際立たない（一定の抜け道の残されている）限り、その理念は生命である。

物理的生命であろうと精神的生命であろうと、偶然的な定存在（より高い生産諸形式は全て）の持つ諸々の条件（支配階級と被抑圧階級との対立）と制限（支配階級の利益）に拘束されない生命は美、すなわち美しきものである。

ii 立法の理性

自他を全員でごまかし合うという個別的な普遍性、人倫的実体を自覚し、精神は条件付けられているものを無条件なものと見做して法、精神の実在と措定するが、この場合の意識が立法の理性である。しかしこの法は、内容を欠いているがゆえに形式的な普遍性にしかすぎない。

（訳26）**資本家流生産様式の諸問題** 共生社会に関するブルジョアジーの科学、かの古典派経済学は概ね、生産と交換に向けたヒトの行為が直接予定している利益社会上の諸々の成果しか扱っていない。このことは全く、その経済学を自己の理論的表現としている利益社会の組織にふさわしい。資本家一人ひとりが直接的な利潤のために生産し交換しているところでは、まず最初に考慮されるのは一番身近で最も直接的な成果でしかあり得ない。工場主一人ひとりあるいは商人一人ひとりは、製造しあるいは買入れた商品に通常のちょっとした利潤を足して売りさえすればそれで満足し、この商品やその買い手に後で生じてくることには気を配らない。それら諸行為の自然上の諸成果に対しても同様²²⁾。山腹の森林を焼き払いその灰によって、大変儲かるコーヒーの樹に一代に施肥するに十

分な肥料を得たキューバのスペイン人農園主たち——彼らにとっては、その後で熱帯の豪雨が今や何の保護もなくなった肥沃土を押し流し、跡に裸の岩しか残さなかったとしても一体全体それがどうしたというのだ。今日の生産様式にあっては、自然に対しても利益社会に対しても大体において最初の最もハッキリした効果しか考慮されていない²³⁾。そのうえで人はまだ、次のことどもを不思議に思う。すなわち、その効果を目指す諸行為から生まれた遠い諸成果が全く異なり大概は正反対のものだからといって、十年間の産業循環いずれもの経過がいつも示しているごとく、またドイツでさえもが「銀行大倒産」の形でその細やかな序幕を経験したごとく、需要と供給の調和が両者の両極的な対立に転化するからといって、自己労働に基づく私的所有がその発展につれ必然的に労働者の無所有へ導く一方、富は全てが働かざる者の手に益々集積するからといって、……*。

*草稿はここで中断している。S.455.

論理的整理【認識の理念】

認識の理念（古典派経済学）においては、実在性（利益社会上の直接予定している諸成果）と概念（利益社会の組織）が、主観的なもの（まず最初に考慮される一番身近で最も直接的な成果）と客観的なもの（後で生じてくること）が対立していて、両者の合一が作り出される。

認識においては実在性（最初の最もハッキリした効果）が第一のものとして、また本質として根底にある。

これに反して行為は善を実現するために、現実を行為に引き付ける（次のことどもを不思議に思う）²⁴⁾。

iii 法吟味の理性

それゆえ指定した法が、本当に法という名にふさわしい在り方をしているか否かが吟味されなければならない。そして、この場合の意識が査法的理性なのである。

（訳27）**利益社会の近未来** 今日の実産諸力を遂に認識されたそれらの本性に従って取り扱うようになれば、[上記の諸問題を萌芽的に含んでいる利益社会的生産と資本家流取得との基本的矛盾が揚棄され——引用者]、利益社会的な生産の無政府状態に代わって、全員や個人各々の欲求に対応する、生産の利益社会的かつ計画的な或る種の規制が生じてくる。それとともに生産物がまず最初に生産者を、しかし次には取得者をも隷属させる資本家流の取得様式に代わって、現代の実産手段の本性そのものに基礎を置く生産物の取得様式が出てくる。すなわち、一方では生産を維持し拡大する手段としての直接的に利益社会的な取得、他方では生活上のしかも同時に受用の手段としての直接的に個人的な取得とが出てくるのである²⁵⁾。

（訳28）**現代人の進化** 計画的に生産され分配されるような、利益社会的生産の自覚的な組織ができてこそ、HITは初めて自分を利益社会的レベルにおいても動物としての残滓を払拭することができるのであって、それはちょうど生産一般が生物における種のレベルでHITを動物界から引き上げたのと同じこと。歴史の発展はそのような組織を日々益々避け難いものに、しかも日々益々可能にしてもいる。まさにこのような組織から歴史の一新紀元が始まるのであって、そこでは人間そのものが、また人間とともにその活動の全分野が、とりわけ自然科学でさえもがまた、今までの一切のことどもをしてそれらの輝きを失わせるほどの一大飛躍を成し

遂げることになるであろう²⁶⁾。

後 記

論理的整理【絶対的理念】

絶対的理念は内在的弁証法の内容（今日の生産諸力を遂に認識されたそれらの本性に従って取り扱う）、つまり科学の内容である。

それはすなわち、即かつ対自的に全く概念（現代の生産手段の本性そのもの）に一致しているような宇宙（生産手段の利益社会的取得と消費財の個人的取得）の考察である。

一層展開して言えば、絶対的理念（人間とともにその活動の全分野）は即かつ対自的に、絶対的に、したがって世界の中に客観的に実在している理性概念（一大飛躍）の考察である。

（3）まとめ

端緒発見からここまでの考察全てで明らかにように、有限な事物の否定性はそれら自体の弁証法であって、これを認識するには何よりもまず有限な事物の肯定的な内容に入り込まざるを得なかった。

（訳29）**人類の消滅** それでもなお、発生してくるものは全てが消滅してしまうのではあるが……²⁶⁾。

論理的整理【総括】

かくして、内在的弁証法は有限な事物を肯定的に把握する中で、同時にその否定ないし必然的没落をも把握し、生成した形式各々（発生してくるもの全て）は、これをその発生、形成、発展、および消滅の中で、したがってその成り行き（消滅してしまう）において把握する。それゆえ内在的弁証法は、絶対的歴史性に立脚する総体的弁証法なのである。

本稿を制作し終え、本稿制作者が抱いたのは「サル HIT 化における労働の関与」を著した F・エンゲルスに対する再度の畏敬の念である。

エンゲルスは HIT ニザルから HIT への身体進化を説明する冒頭で労働を、現世人類の生活全体における最も基本的な条件として受け入れ、第一に、類人猿の木登り垂直攀縁動作が HIT の先祖に地上での直立二足歩行へという大飛躍を促し¹⁾、この歩行で自由になった手が石器を製作した、と 1 世紀以上前に喝破していたのには溜飲の下がる思いがした。石器製作を皮切りに、次いで発話能力が発生してからはその労働とともに発話が長大な時空で反復され、この客観的基準が類人猿のような脳を次第に HIT の大きな完全な脳に移行させ、今日に至ってきているとする論理は HIT の在り方を的確に捉え得て、現在でも十分な説得力を持って本稿制作者に迫ってくる。

第二に、食い尽くしが契機となって HIT の先祖は植物性食料を多様化させ、HIT 化に必要な化学的諸条件を多様に摂取していった。石器の製作使用に基づく食料生産が HIT の可能的本質となってこの労働が肉食を促進させ、肉食という根拠が脳の発達を刺激し火を征服させ、これが転機で HIT の先祖は特殊な放散をしていったと指摘したうえで、精神労働を営めるまでに労働を高度化させ普遍的に拡散した、と HIT 化の本質を反省する手際のよさも実に見事。

そして第三に労働がさらに、完成した脳髓を以って HIT に自発的に自己批判する能力、目的意識を身に付けさせ、ひいては遠い未来予測を可能にさせ、この見通しで現在の真なる姿を理

解する理性を発生させた，とする論理展開は完成したヒトの在り方を位置付け得て妙。この草稿中断後の終局部分でエンゲルスは，認識手続き上の必然性からしておそらくヘーゲルが語った「法吟味の理性」を唯物論的に継承し，利益社会についての近未来予測を論述する計画だったに違いない。

その利益社会的新紀元の第一歩は，マルクスが『資本論』で論述しエンゲルスがこれと同じ趣旨を『反デューリング論』第1篇13に記述している通り，資本主義経済それ自体がブルジョアジー独裁を必然的に衰退させる客観的基盤を現世人類が統御し，プロレタリアートの階級的独裁（絶対に，個人崇拜や政党独裁ではない）下で，多くの個人的労働力を自覚的に利益社会の一労働力として支出する自由な労働者の協業と，土地や労働生産物の共同所有（と言ってもこの所有形態は，必ずしも国家が直接的に所有する形態だけを意味しておらず，ましてや発生してから2世紀くらいしか経っていない国民国家などというものは思いの外近い将来に消滅してしまうのであろう）とに基づき，この共同所有物のうち生産手段を除いた一部を個人的消費対象，すなわち私有財産としてしなやかに用いるような自覚的かつ計画的な経済体制を以って始まる，と述べられていてヒトは現在これを建設する実在的可能性を獲得してきている，ヒトの脳髄は既にその能力を備えるまでに進化してきているとエンゲルスは確信していた。今日では新製品の商品化に先立ち，グローバルなインターネットを使ってどれだけの需要が見込めるかを計測し，あらかじめ供給量を弾き出す市場調査企業が興されているのである。

グローバリゼーション下における意図的な平和戦争間振り子運動によるアメリカ経済の延命

策²⁾は，特に最近兵器世界市場独占に活路を求めざるを得ないような帝国主義の断末魔のごとくに見えてしまう。この危機に際して小泉流構造改革のような，国家権力を以って経済が支配できるとするのは「共産主義，社会主義的な発想³⁾」だと見做されてもいるが，政財官の諸問題を市場原理を無視してでも恣意的な「理念」で是正しようとするのであれば，それは国家社会主義的色彩を帯びたものでしかないであろう。この道は一面では共生社会的な含みを破壊したうえで，人々を今の日本より一層酷くアングロサクソンの市場原理横暴の奴隷に陥れるだけだ。だが，一部のエコノミストたちが主張しているごとく，平和裡に意識的に危機を乗り切る現実的な道が開けているからには我々は，民主主義を徹底的に発展させ資本主義的な経済法則を利用し支配し得るようになり，世界中のひとびと大多数の幸福と安寧を図ることこそ肝心。すなわち国際的連帯の下で，人民大衆の自由な創意による多様な方法によって競争を組織する道である⁴⁾。と言ってもこの事は，種々雑多な処方箋が錯綜するから言うは易く行うは難しで，その道の政策はやはり内在的弁証法を以って整理し客観的に必然的な指針を得るようになければならない。であるからして現代人の進化とは一層自由に拡散するため，全生活の基本たる労働を，肉体労働も精神労働も併せてさらに進歩させることによってもたらされるような変化なのである。かくして，果てしなく遠い未来にヒトは何等かの他のものに移行せざるを得ない，つまりヒトとしては絶滅せざるを得ないとしても，少なくとも現在におけるヒトの在るべき姿は理性的思考を鋭くし，外界を完璧目指し自覚的かつ計画的に変革してゆかざるを得ないような在り方と結論づけている。よって以っ

て、経済的社会生活でもその自然発生的無媒介性を断ち切り人間的なものに変革し、個人も自発的自己批判能力を以って労働する中で、普遍的な本質を獲得し、ヒトはまさに類的存在としてその名にふさわしい動物になれるのである。

しかしそのことはともかく現在、人類進化の解明に携わる多くの研究者はかのエンゲルス草稿を死んだ犬として扱っているようである。

確かに現代の関連諸科学は、新しい情報を種々与えてくれている。例えば、人類進化に関する生物学研究はヒトの脳の大化現象を数値で示している。ではあるが、これまでのところなぜ脳髄が新脳化してきたのか、なぜ現代型ホモ・サピンスで前頭前野が急に発達したのか、については何の根拠も明かしてくれていない。現代遺伝学は獲得形質が遺伝することはない、と普遍的結論を出しておきながらどの変異遺伝子が、いかなる選択圧の下で、どのようなメカニズムを以って大脳化させたのか何も説明してくれない。ヒトには水掻きの名残があるから、かつては両棲生活を営んでいてこれが原因で体毛を無くした、とする説にはどう応答するのだろうか。イヌにも水掻きの跡がはっきり残っているが、特別に改良された品種以外は総じて毛が豊かである。分子進化の研究がヒトとチンパンジーの違いは分子レベルでは僅かだと教えているが、DNA塩基配列における1.23%の僅差がなぜヒトとチンパンジーとの大差をもたらしているのかについては、今迄のところ口を噤んだままである。分子進化は形態進化に中立だ、とも考える研究領域だから恐らく無解答なままだろう。期待は、ヒトゲノムに関する総合研究に掛けられるのであろうか。仮説としては、ヒトニザルの段階で既に脳を発達させる胚芽的な

遺伝子が備わっていて、これが石器製作と発話の実践反復下で漸進的に変化し、或る段階ごとに断続的に進化した、という見解が成り立つのかもしれない。

最後に、断り書きを認めておきたい。本稿は本学大学院応用社会学研究科博士課程前期課程、2000年度前期における講義「人間文化研究」で使用するため訳出し整理し制作した教材とレジメに手を加えたものである。最初は内在的弁証法に対する「おや何だ？」反応を期待し、全く加筆せず本誌に掲載するつもりであった。講義形式によっていかなる内容を扱ったかについての一端を或る種の義務として報告したかったのと、本当の弁証法は何だか滅多矢鱈難しいものだということにまず最初に気づいてもらいたかったのが元々の狙いであった。内在的弁証法を習得するには自分で問題点を見出し、自己内で批判と自己批判を繰り返し修行を積み重ねなければならないことに気づいて欲しかったからである。しかし、序文に紹介したような経緯でこのような形態になった。すると案の定、人伝に聞いた話では、前の原稿より今度の方がわかり易いと評定した者がいたという。自分が裁き返されるのも知らずイエス・キリストの「人を裁くな」という教えを反芻せず、チンピラ左翼のように実質は自分の反発的批判を他者に押し付けるだけの批判と自己批判なる二項対立を鵜呑みにし、両項の統一たる「自己批判の自発性⁵⁾」には全く無自覚な、そんな評論屋が例の教えたがりで注を欲しがる甘ちゃんであった。本物の弁証法はヘーゲルが指摘していたように、絶望の淵に何度も沈み、その度に光明を見出し浮かび上がってゆかねば理解できないのに……。そんな簡単にわかるのであれば今度は内在的弁証法を駆使し、形ばかり気にして「好い加減なお

上品な学者振り⁶⁾」でカモフラージュした自分の論文なるものを科学的レベルに高めてみよ。わかったと言っても、わかったつもりと、分かったと、判かったと、解かったとでは大違い。何ならまず、進化とはここではほぼ発展と同義であるから、発展に関する許萬元氏の説明⁷⁾を参考にして、この「サル」のヒト化における労働の関与」全体を800字以内で要約してみ給え。かの講義では、本稿における注の詳細さには到底及びもつかない簡単なレクチュアにしかすぎなかったはずなのに、受講生は努力してその課題に答える精一杯のレポートを作成した。なお、日本共産党の「発展」を「質的に新しい状態が生まれてくるような変化」とする独断では、石器捏造問題にせよ環境問題にせよ何にせよ、オリジナリティー好きの資本主義とは場当たりのにしか戦えないことに思いを致せ。それにつけても、科学論文を完成させるにはもっと苦しい修行が強いられよう。そこで宮本武蔵『五輪書』から、次の一句を読者に贈って本稿を終了したい。

千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を練とす。
能々吟味有るべきもの也⁸⁾。

注

- 1) ヘーゲル概念論における「普遍・特殊・個別」の現実的な意味を平易に解説したものとして、牧野紀之「昭和元禄と哲学」『生活の中の哲学』,(鶏鳴出版,1974年),73-88ページ,がある。
- 2) Hegel, G. W. F. *Nürnberg und Heidelberger Schriften 1808-1817*. Suhrkamp, 1975, S.193. 武市健人訳『哲学入門』,(岩波書店,1952年),201ページ。
概念は対象そのものの運動が思考に反映する認識過程の発展と、存在過程それ自体の発展という二側面の媒介であるが、エンゲルスはタマ

ネギの皮一枚を剥くように、最初は前者だけを剥がしこれを概念の形式に転化する。であるからしてこの思考作用は一面的な悟性に外ならず、その展開は形式論理学と言わざるを得ないのである。もちろん、個別→特殊→普遍と進む認識が首尾よく成就すれば個別=普遍であるから、本文の次の段階で指摘するように普遍→特殊→個別という存在過程それ自体の発展過程も成立することになる。

- 3) これが「世界の普遍的相互連関」と言われるものであるがそれは、エンゲルスはヘーゲルに倣って、原因は能動的で結果は受動的と固定する因果的連関に縛られているような悟性では捉えられないとしている。
- 4) 「偶然とはなんの原因も根拠もないということではない。自分自身のなかに根拠をもたない、つまり他者に根拠をもっているということである」〔牧野紀之『生活の中の哲学』,92ページ〕。しかしここで、それがその動物にとって偶然であると言われる時、それはその動物に根拠・原因があるのだが、動物には自覚されていないということである。つまり「盲目的必然と偶然とは同一であり、自覚していない自分は他者と同じだということである」〔牧野紀之『マルクスの読書会』,(鶏鳴出版,1975年),54ページ〕。
- 5) 食虫植物の生命維持活動を以て、エンゲルスは必然的判断の例としている。というわけは、その判断は定存在の判断と反省の判断との統一へ展開した状態であり、この状態を動物と植物との統一たる食虫植物の食餌行動が表しているからなのである。
- 6) 要するにこの辺で言っていることは、第一に反応する原形質と合目的な行動、すなわち計画的な行動との必然的な結び付きである。
第二に、ここで初めてはっきりと目的意識のない合目的性に触れられているが、これはヘーゲル『小論理学』第204節への注釈に指摘されているように、近世哲学の伝統を一步進めるものである〔これら二点は、『マルクスの読書会』,55ページ〕。
- 7) 胎児の身体的個体発生における系統発生の繰り返しは、コドモの精神発達にも似たような傾

向として見られると言っている。なお、19世紀後半の自然研究は一般的に短い期間しか過去を溯らない。ここでの「何百万年」は、今日では大雑把に「何十億年」と言わなければならない。

- 8) この（訳19）のパラグラフは、先の「自然に対するヒトの作用は、ヒトが動物から遠ざかるに比例して一層前以って考え抜かれた、すなわち計画的な、すなわち前から分かっている特定の目標に向けられた行動という性格を帯びてゆくようになる」という動物とヒトの違いに関する第一命題を修正して、動物にも計画的な行動様式があることを認め、それが植物ではまだ無自覚だが動物では自覚的になり、その意識性は神経系の発達に比例すると言っている。したがって、当然のことながら、人間と動物の違いは量的なものになり、動物の行為の結果は小さく人間のそれは大きいとなる。しかし、それこそ量質転化ということもあるから、それをたんに量の違いとして済ませてよいということにはならない。次のパラグラフの有名な言葉は、文脈から考えて、直接的には、恐らくこのパラグラフのまとめである。それは次の注にゆずって、ここでは、先のパラグラフの末尾にあった、人間の行為の結果と動物の行為（更に一般的に、人間以外の原因による出来事）の結果との大小について考えておこう。一般的に言って、行為の結果の大小で両者を区別するのは拙い。なぜなら、地殻変動などというのはともかく、地球の周りにある大気一つ採っても、これは地球のできた時からあったのではなく、原生植物みたいなものの物質代謝の結果である。しかし、意識的見通しについて言うと、動物の自覚は時間的空間的に限られていると思えるが、これも必ずしも正しくないのではなからうか、大分先のことを考えて（？）食料を蓄えるものもあるし、渡り鳥は遠くのことを考えて飛んでゆくのである。したがって、残るのは、動物の意識性がその動物の生理的機構に依存しており、生得的であるということしか考えられない〔以上は、同上、55-6ページより〕。

ただし本稿制作者はエンゲルスはここで、量の推理〔ヘーゲル『小論理学』、第188節〕を念

頭において論理を展開しているのだと考える。この点を知りたい読者はヘーゲルの推理論と、マルクス『資本論』第一部、第1篇第1章第4節「商品の物神的性格とその秘密」を参照し熟考すること。マルクスはここで、労働について次のように推理している。

ロビンソンの労働（定存在の推理）：自分の生活手段に対する一人の労働

共同労働（反省の推理）：利益社会的な生活手段なるものに対する何人もの労働

（ここでの分配の仕方は利益社会的な生産有機体そのものの特殊な種類と、これに対応している生産者たちの歴史的発展程度とに比例して変化するであろう）。

商品生産（必然性の推理）：自分以外の私的労働者の生活手段全てに対する一人の私的労働

なお、この推理論の前段に位置するヘーゲル判断論を活用した、マルクスの価値形式論における量的な発展諸段階の概念的意義については、マルクス著牧野道場訳『対訳初版資本論の付録』（鶏鳴出版、1974年）、212-7ページ、に解説されているから併せて参考にとよい。

- 9) この命題を第二命題として位置付けたうえで、これに関する牧野紀之氏の以下の見解〔『マルクスの読書会』、57-8ページ〕は、傾聴するに十二分すぎるほどの価値がある。すなわち、この命題の意味を知るには、一步突っ込んで、利用と支配とはどう違うのかと問い、その違いをもたらすものは何かと考えることである。すると、それはdurch seine Anwesenheitとdurch seine Änderungenであることに想到する。すると、このAnwesenheitとはどういうことか、人間のÄnderungenとはどういうことかと考えることになり、従来の訳では何の役にも立たないことが分かる。これまでの訳をみると、durch seine Anwesenheitの方は、どれも「その存在によって」といったような直訳をしているが、durch seine Änderungenの方は「その変化によって」と直訳しているのと、解釈を加えて「人間はみずから変化をもたらすことによって」（国民文庫版『猿が人間になるについての労

働の役割』, 20ページ……Aとする)とか、「人間はみずからその変化によって」(寺沢・菅原共訳国民文庫版『自然弁証法』第一分冊223ページ……Bとする)とか訳している(田辺訳現行岩波文庫はAと同じ)。Aの「人間はみずから変化をもたらすことによって」というのは完全な誤解である。これだとその「変化」とは人間自身の変化ではなく、人間が外界に引き起こした変化のことになる。Bは「みずから」がどうつながるのかわからず、日本語になっていない。要するに、このdurch seine Änderungenがこれまでいかに研究されていないかが分かる。この「人間の諸変化」とは何のことなのか。これを初めて研究したのが、牧野紀之『労働と社会』,(鶏鳴出版, 1971年), 特に85-8ページであったというのである。

そしてこれらの点を一層発展させ、この部分を「人間は自分の方でいろいろ変わることにによって〔自分の〕外にある自然を自分の目的に奉仕させ、自然を支配するのである」と訳している。すなわち、自己内で批判と自己批判を繰り返して目的実現過程を観念的に前以ってシミュレートする自発的自己批判能力、つまり理性的自己意識と捉えている。この無限に近く発達し得る実在的可能性こそは、身体的に完成したヒトに固有な目的意識なのである。

- 10) この点に着目すれば、ヘーゲルが多分正確だとして取り上げた「人間は思考によって動物から区別される」(『小論理学』第2節)という命題は、我々現代型ホモ・サピエンスの可能的本質を指していたことが解かる。
- 11) ここにエンゲルスは鉛筆で注をして「推敲すること」と書いているという。このパラグラフは詳しくしかも論理的に展開されなければならない。しかし「これまでにそれを展開した人はおらず、これは自称マルクス主義者たちの研究と理論水準とがそこまでいいないからである」(『マルクスの読書会』, 58ページ)。
- 12) これは要するに、注8)に書いた「見通しの程度」について、人間が動物よりまさっていると言っても大したことではない(少なくとも現時点では)と言っている。したがって、ここか

ら反省してみると、先の第二命題での「支配」とは、さしあたっては自然に対する「第一次的な」支配のことだったようである。もちろん端緒形態には発展全体の可能性が含まれているから、潜在的には真の自然支配をも意味しているのだが……〔同上〕。

この辺の文章は公害論などでそのまま引用されるのだが、こんな片言隻語を未消化のまま論文に挿入したからといって、そうすることによってどんな意味があるというのだろうか。もし「科学的」粉飾を凝らすためにエンゲルスを利用したとすれば、面白さや表現の上手さにつられ「引用してやろう」と考えたのと同じで、他人の本をたくさん引用し作文したにすぎず「他人の学説にたよっているわけで、自分の創造にかかわる部分がすくないということ」(梅棹忠夫『知的生産の技術』,(岩波書店, 1969年), 117ページ)の証しに外ならない。直接的にはマルクス主義や科学的社会主義とは縁も所縁もない梅棹忠夫氏が反発的に批判するような、注だらけで創造性薄いスクラップブック紛いの雑文作りが近年ではいわゆる「進歩的知識人」の間で大流行。これでは進歩的でもなければ、ましてや革新的でもなくまさしく後衛だ。

- 13) ジャガイモは癰癤と無関係だったから、ここは「ヨーロッパにジャガイモを広めた人々はそのデンプン質の根茎と、これが病因の癰癤をも広めた〔とするそんな誤認を19世紀の人々によって、まことしやかに吹聴されよう〕とは思ひもしなかった」と〔 〕部分を補って理解せねばなるまい。
- 14) ここでエンゲルスは舌足らずの感はあるが主に、帝国列強のトップ・グループにいる者たちの支配を念頭に置いていたのであろう。彼らは宗主国に止まったままで超然としていて、表舞台に立つことなく優雅な生活を送り、自分たちの下に属している人々に支配を任せっきりにしていた。現在でも支配に直接手を染めることなく、悠々自適の生活を送っている者たちがいることに関しては、さしあたり広瀬隆『アメリカの経済支配者たち』,(集英社, 1999年), を参照。

15) これを第三命題としよう。この命題の内容は、この文脈で見る限り「正しく」応用するという点に力点があり、その「正しく」とは、第一次的な結果だけではなく、第二次的、第三次的…結果をも「正しく」見通して応用するということであろう。すると、動物と人間との違いは、さしあたっては、やはり見通しの程度問題ということになるのであろうが、人間でも初めは第一次的な結果しか見通せなかったのだし、その点では動物と変わらないのだから、結局人間の特質は、その見通しの程度がどんどん高まり、どこまでも無限に先まで見通す「可能性をもっている」ということになってくる。このことが次のパラグラフの冒頭の文につながる〔『マルクスの読書会』, 59ページ〕。

16) Gegensatzに einem という「否定せんがために仮に設けて見る仮定の事実」を表す仮構の不定冠詞〔関口存男『ドイツ語冠詞』, (三修社, 1966年), 47ページ〕が付されている。

社会運動などに携わっている者が事が多少前進すると、よく「我々の理論の正しさが実践によって証明された」と喜ぶ。当為の無力を分かっていたレーニンが色々な制約を負った個々の実践は、決して理論の正しさを完全には確証も論破もするものではないと繰り返し注意していた〔例えばレーニン全集, 第5巻, 大月書店, 145-6ページ〕にもかかわらず……。理論と実践の統一 (Einheit) とは理論と実践は元来が一つだという事実命題なのであって、理論は実践されなければならないという当為命題ではない。理論の正否が現実を反映しているか否かということであれば、たとえ虚偽であっても現実を反映していない理論はない。そもそも、理論なるものを頭に浮かべること自体が実践ではないのか。世界は各々が自己内分裂してもいるがその分裂が統一されてもいて、そこでの相互排除も相互依存も一切をまとめた一であるのに、理論と実践が恰も対立関係にしか置かれていないかのように見做し、常に統一させねばならない理論と実践の対立とは「キリスト教において最高潮に達した、精神と物質との対立、ヒトと自然との対立、魂と肉体との対立、などといったよ

うな不合理な表象と不自然な表象」以外の何物であろうか。かくして以上のことどもを他山の石として、我々は内在的弁証法の修行に弛まず励んでゆかねばなるまい。この「理論と実践の統一」に関して詳しくは、牧野紀之「理論と実践の統一」『哲学夜話』, (鶏鳴出版, 1977年), 51-79ページ, 参照。

17) 近世においては、自然科学はこのように宗教の教えと反対のことを教えることになったので宗教から弾圧された。したがってそれは、宗教と戦いながら発達した。しかし、19世紀以来宗教はむしろ自然科学と妥協し「自然認識は科学で、価値や幸福の問題は宗教で」という形をとるようになってきている。だからこそエンゲルスのこういう考えをそのままの形で現在に持ち込んでも、現実の思想闘争には役立たないどころか、むしろこういう自然研究者が個人崇拝や政治的宗教の泥沼に嵌まり込むことになるのである。これは牧野紀之氏のかねてからの持論であった。

しかしそのことは自然研究者だけでなく、今日の経験的研究者全員も陥りそうな危険性であろう。それどころか私見によれば、日本共産党の幹部でさえもが時々聖職者と同じような質のことを言う。例えば2001年の参院選で敗北を喫した後、テレビからその弁解が聞こえてきて、私ゃ目玉飛び出さんばかりに吃驚仰天ズッコけた。曰く、党の理論は正しかったが、人々にその正しさを受け入れてもらえなかった……。『党の理論』が弁証法解釈を指すのか情勢分析を指すのか目先の政策を指すのかははっきりしないが、その発言と「神様は全知全能でいらっしゃるのに、人間は弱いものだから、なかなかそのありがたさが分からない」という宗教者の嘆きとどれほどの違いがあるのだろうか。たんなる迂闊発言で、科学的方法たる内在的弁証法の修行を怠り、人間論に流された結果でなければよいのだが。マァ一般の党員研究者が少なからず、弁証法の悟性的解釈を本物の弁証法だと信じ切って、ヘーゲルの著作は言うまでもなくマルクスやエンゲルスの著作の邦訳にさえ碌々目を通さず、精々機関紙・誌等の受け売りに終始して

いる様子も稀に窺える現状では革新政党の宗教団体化の危うさが常に付き纏う。事実調査では、他党に比べ熱心なだけに惜しまれてならない。

- 18) 今日の研究結果から言えば「数百万年」としなくてはならない。
- 19) ここでは、動物と人間の違いということは前面に出ていないが、行為の社会的結果を見通せるか否かで動物と人間を分けることを、第四命題としよう。この点でももちろん、人間は初めからそれができるのではなく、その可能性を持ち、その見通しをだんだん遠くまで及ぼすように向上していける点で動物と違っているのである〔『マルクスの読書会』，60ページ〕。
- 20) 自然支配と自然的結果の統制のためにも「たんなる認識以上のこと」、実践が必要である。
- 21) 余分な土地を有していることが客観的な存立条件である原始社会を、土地のゆとりが繁殖に欠かせない森林にたとえて、wald-ursprunglich という合成形容詞を用いている。
- 22) この辺については、資本主義経済における実例を挙げるのに事欠かない。

大手企業グループが欠陥車を、そのリコールを公にすることなく大量に販売したり、製薬会社が非過熱製剤を HIV 感染の恐れがあると知ってから以降も販売継続のために様々な裏工作の仕掛けを試みたようだし、農業で自然が汚染されてもとにかく「近代化」に迫られ、公害をたれ流し続けたりといったことがその一端として挙げられる。

記憶に新しい、政府の BSE（狂牛病）対策の助成が切っ掛けで表面化した食肉表示の偽装は刑事詐欺だが、研究水準が低く悪影響を見通せず、あるいは利点しか目に付かず行うこと、例えば精神障害による興奮抑制のため施された前頭葉の白質切除、ノーベル賞を受賞したロボット手術の例もあるから、これを前者と同一視することはできない。しかし後者でも、後遺症の酷さに非難が寄せられ今では施されなくなっている。それにしても無知とは怖いもので、脳の働きをコントロールする器官である前頭葉を傷つけたなんて、まっこと栄光に満ち溢れた輝かしいオリジナリティーであった。

研究水準の低さゆえ、研究結果がいわゆる「国益」なるものの追求に悪用されることもある。アメリカ合衆国政府が捕鯨禁止運動に火を点けた件がそれである。自国のエネルギー政策への非難をかわすため、総体から明らかになってもいないのに、地球規模で鯨の総数が減っているとする一部研究者の主張を前面に押し出し問題をすり替えた。また、地球史的周期での現象かも知れぬ地球温暖化は、CO₂などの増加が原因だと決めつけ京都議定書が作成されたが、ブッシュ政権はこれには科学的根拠がないとしてその批准を拒否した。ブッシュ大統領の意見は *Nature* 誌にも紹介されたが、これに対する有効な科学的反論は出されていない。所詮○か×かの悟性同士の争いには、科学的な決着の着けようがないだろう。ここで物を言うのは、観念なき力（Gewalt）の強さで、事態は1998年度一回生基礎演習において学生諸君が判断・推理したとおり原発回帰へと進みそうである。本稿制作者は環境保全と浄化には一般的に賛成だが、現在主張されているその運動を進める根拠には納得し難いことがしばしばだ。

ついでに指摘しておけば一頃、動物の繁殖に対する環境ホルモンなるものの悪影響とかがヒステリックに叫ばれ、この説を支持する研究者がマスコミのセンセーショナリズムに悪乗りしそのオリジナリティーを積極的に解説していたが、近頃ではその研究のデータ収集自体に疑問が投げかけられ結論を得るのに慎重になってきている。かの支持者たちに絶対的に正しいと自分で信じていることでも、自分で疑って考える姿勢が欠けていたことの典型を見るが、先の鯨の例にしる地球温暖化の例にしる、功に逸ることなくせめて武谷三男氏の三段階説追求の姿勢を見習い、自然研究者は手始めにいわゆる「断片的弁証法」でも積み上げていって、経験的研究そのものの科学化に努力してゆかねばならないのではなかろうか。

- 23) エンゲルスはここで、こういう目先の利益しか見ずに長期的根本的な利益を軽んずるのは資本主義に固有の見方であり、特にブルジョアジーの見方であると言っている。しかるに日和見

主義を定義してエンゲルスは「運動の現在のために運動の未来を犠牲にすること」〔1891「1891年の社会民主党綱領草案の批判」、マルクス・エンゲルス全集、第22巻、大月書店、235（原）ページ〕とし、レーニンは「日和見主義とは一時的部分的な利益を得て根本的な利益を犠牲にすることである」〔1920「ロシア共産党（ボ）モスクワ組織の活動分子の会合での演説」、全集、第31巻、447ページ〕と言っている。これらを勘案して牧野紀之氏は「革命運動における日和見主義とは、プロレタリアートの内部におけるブルジョア的な考え方の現れ」〔『マルクスの読書会』、61ページ〕だとしている。であるからして「マルクス主義」だとか「科学的」社会主義だとかに属していると自分で決め込んでおきながら、悟性を以ってスクラップブックもどきの雑文を書いてヨシとし、内在的弁証法を活用して科学論文を制作する努力を怠っているような者は全てが日和見主義者なのである。

- 24) エンゲルス草稿はここで中断しているが、終局部分が不明確なままでは画竜点睛を欠く。そこで以下にその草稿とほぼ同じ時期に執筆された他の下書きから、論理的にその部分に該当する文言を引用し補充しておくことにした。端緒→進展→終局とやってきて、終局で客観的認識が規定する主体の使命が明らかになる。これが内在的弁証法の機能であるから、客観的で全面的な認識の明確化こそはその弁証法の真骨頂。この真実を白日の下に晒すことは、科学の階級性に関わる重大問題なのである。

ところが何人かの人々が、本稿制作者に「欠損部分を勝手に埋めてしまうのは如何なものだろうか」と真に丁寧な御教示を下された。かくも御親切な実証主義に傾斜する者たちが「革新」面をしているのには、こりやまた驚き、桃の木、山椒の木。脳天に空手チョップは、頭が割れそうなこんな目眩だろう。positivismeとはA・コントやE・マッハ以来高々体制内変革、改良主義的改良に止まる現状維持の立場と相場が決まっている。好奇心の強い本稿制作者としては、なぜエンゲルスは中断したまま放置したのだろうかと考えるが、天使のようなあの純真

無垢な心の持ち主は、開祖たるエンゲルス様の御心には逆らうなどと言う。だが答は簡単だ。自然に関して急速に進歩してきた経験的研究の諸成果を唯物論的弁証法によって整理する目的の原稿やメモの他の箇所、あるいは同時期の他の草稿で、かの未完部分に相当する文章を認めておいたからには、この草稿で同じことを一々筆写する必要はなかったに違ひなからう。このように真実を明らかにすることは、エンゲルス様に逆らうどころかむしろ崇めることになるのである。

マァ、そんな頓痴気の話は放つとして、科学の階級性に関する私見を以下に掻い摘まんで提示しておきたい。

18世紀までの混沌とした「科学」のごときもの、まだ昂揚期にあったブルジョアジーの経験をベースとする、その研究の諸成果を体系化したのはヘーゲル哲学であった。しかしヘーゲルの科学は全てが、時代と活動地域の制限ゆえにブルジョアジーの立場に止まった。マルクスはヘーゲル弁証法を足で立たせた、合理的な姿態における叙述の仕方が自分の方法だと説明していたが、これこそまさしく科学的方法なのであって、この弁証法は現存するものの肯定的理解の内に、同時にまたその否定、その必然的没落の理解を含み、生成した形式いずれをも運動の流れの中で、したがってまたその経過的な側面から捉え、何物によっても威圧されることなく、その本質上「批判的かつ革命的」〔マルクス 1873「資本論、第二版への後記」、全集、第23巻、28（原）ページ〕であり、絶対知あるいは科学＝哲学という最終カテゴリーにおいて体系と方法が矛盾してしまったヘーゲル弁証法とは正反対である。それゆえ資本主義的生産過程に関する科学、『資本論』第一部の終局、第7編第24章第7節は少数の横奪者に対する人民大衆による収奪期の必然的到來、利益社会前史の終焉を論証している。エンゲルスやマルクスの完結した著作全ての終局には、必ず科学対象の規定＝使命が述べられている。例えばエンゲルスの『空想から科学へ』の最終パラグラフは、近代プロレタリアートとともに科学的社会主義

の規定＝使命を指摘している。こうしたマルクスやエンゲルスの論述は、科学の階級性を示した業績以外の何であろうか。

つまり労働者階級こそは弁証法的唯物論の概念の立場を具現しているものであり、プロレタリアートこそが社会をも自然をも客観的に認識することができ、社会生活の変革主体に昇り得る階級と客観的に判断することができる〔牧野紀之「ヘーゲルの概念とマルクスの賃労働者」『思想』、第592号、(岩波書店、1973年10月)、89ページ以下——後に「ヘーゲルの概念とマルクスの賃労働者階級」として『ヘーゲルからレーニンへ』(鶏鳴出版、1979年)、所収)のである。かかる帰結は弁証法のコアたる概念論、なにかなく理念を抜きには語れないのであって、経験的研究に頼りだけの「論理性をかけた、グラダラとした記述」〔井尻正二『科学の階級性』、(築地書館、1973年)、39ページ〕から恣意的に出されるものではない。それはまた、形式論理学による分析を先行的に叙述しておいて、しかる後に弁証法が前面に押し出されてくるというような御都合主義から気儘に引き出されるものでもない。ここに引き合いに出したとき科学前のものもを「科学」と見做しその「階級性」を云々するのは、価値判断は主観的だとする新カント派のブルジョアジーに与するごまかしと同列だ。対象の内在的弁証法を総体性において徹頭徹尾貫き通した体系こそが科学というものであって、これは「労働者階級の下では決して滅びはしない。なぜならそこでは出世や金儲けを考えたり、お上からの温情的な保護を受けようと氣遣ったりすることが行われないからである。反対に科学が何かに囚われることもなく、遠慮することもなく突き進めば進むほど、科学は労働者の利益や願望と益々一致する」〔エンゲルス 1888『フォイルバッハ論』最終パラグラフ、全集、第21巻、307(原)ページ〕ことになる。自然の領域における何等かの対象についても、内在的弁証法を概念運用技術として首尾よく使いこなし切れば、完成した論文は「批判的かつ革命的な」労働者階級の利益や願望と一致することになり、かくしてこの自然科学は

プロレタリアートの立場に合致していることになるのである。

来るべきプロレタリアート独裁の下では、すなわち自覚的な利益社会的組織を追求してゆく社会主義の下では、科学は「人間と自然との本質的同一性の成就」〔マルクス 1844『経済学・哲学草稿』、全集、第40巻、538(原)ページ〕を推進してゆく社会を反映する。もちろん将来、共産主義の第二段階への移行においてプロレタリアートは自らを揚棄し全人類を解放し切らざるを得ないのであるから、この時期に科学は何等かのグループ内リーダーとフォロワーという区分をも含め固定的分業を廃止する、全人類の解放に一致して革新的なその本質が現象する。そして無階級社会が実現すれば、対象の現在を捉えその成果に立って本質を反省し、この過去から現在の意義を捉え直し、対象の発展を概念的に把握する科学の基本は存続するにしても、その階級性が消滅することは言わずもがな。換言すれば、科学は全人類の利益や願望と益々一致することになる。畢竟、思考は存在と同一なのである。

「哲学はプロレタリアートを揚棄することなしには実現され得ず、プロレタリアートは哲学を実現することなしには揚棄され得ない」〔マルクス 1844『ヘーゲル法哲学批判序説』、全集、第1巻、391(原)ページ〕。

しかし現時点においては社会科学でも自然科学でも支配的な、経験的研究の諸成果を無手勝流に繋ぎ合わせただけのスクラップブック紛いのお話では、たとえそこに「断片的弁証法」が用いられていたとしても、いかに権威ある知識を数多く引用し注をバカ丁寧に記載したとしても、それら諸知識の科学的意義と限界を明らかにし消化し観念化し、弁証法的カテゴリーとして我が物にしていけない限り虎の威を借りる狐の小賢しさにしかすぎず、総体性を全うしていないこの下痢症状は他人の禪で相撲を取るに等しい。もし弁証法的唯物論を導きの糸として活用し、そのカテゴリー化を見事にやってのけ必然性に基づいて体系化を完結させれば、カントやヘーゲルやマルクスやエンゲルスが見本を示し

たように一々細かい注など付ける必要はない。なぜなら、経験的研究者たちの諸知識は外ならぬ科学者個人に固有な概念へ消化されてしまっているからである。消化され血肉化されたものは、証文を以ってしても他人の所有権の自由にならぬことはシャイロックの蹠跟が雄弁に物語っていた。お話を作るか経験的研究の結果報告くらいしか書けない能力水準の者が、オリジナリティーに拝跪し味噌も糞も一緒にして科学論文に参考文献リストを強要するのは、闇雲にパテントを楯に取って商品に、それを切望している人々、例えばエイズで悩んでいる少なくない人々には入手困難な独占価格で薬に値を吊り上げ、ポロ儲けする資本家流のあくどい手口を利することへ繋がっているに等しい。絶対的信仰でさえ自問自答できない非科学的思考の持ち主が、支配的な思想は支配階級の思想だなどと知ったか振りで言い触らすのは何と形容したらいいのだろうか。論文には注が絶対に必要だとする信心で凝り固まっている偏執者どもは、注を欲しがること自体が多くの問題を孕んでいるのではないかと自発的に自分を徹底して疑い得ないほどの機械論者なのだ。それでもなお『資本論』に見られるごとく、細かく参考文献を注として記載するのであれば、何等かの知識それぞれの研究史上最初のを厳選して引用し、注そのものの順次的配列全体が研究発展史を説明していてこそ科学的意義が生じるというものであろう。

かくして、何等かの経験的研究にしか携われず科学の必要条件を充たすだけで、諸事実を論理的に捉え直せないような者が「科学者」だと自称するのは片腹痛い。科学の如何なるものかを弁えていないそんな連中が、寄って集って科学の階級性を問題にしても或る程度の合意形成すら図れないのも当然。かつて日本共産党文化部が『文化評論』（通巻第99号、1969年12月。および通巻第105号、1970年6月）で特集した「科学の階級性」は、ガマの油売りの口上宜しく荒唐無稽で、だが然程のリアリティーさえ感じさせない「党派性」オンパレードの体たらく。その後、かかる事態が改善されたという話は寡

聞にして知らない。このままでは、社会主義政権は悟性に頼るだけでも鉄砲から発射されるように生まれることがあるかもしれないが、社会主義建設はとてもじゃないが望み薄。下手すりゃソ連邦崩壊の二の舞だ。というわけはこれの建設は、人間としての生活の全面に亘って、そこでの諸問題各々を発生、形成、発展、および消滅において、つまり内在的弁証法によって真なる在り方を論証し、社会を総体的に概念的に把握し得る人々が増え、将来的には共産党など自ずと消滅するようになってゆかねば成功しないからだ。このことは何も、社会主義建設という近未来的な大事業に限ったことではない。何等かの組織運営の上層に申し上がった「革新的諸氏」が、だら幹に成り下がった例は古今東西枚挙するに暇がない。それゆえにこそレーニンは、前衛党の機関誌に携わる者たちのグループは一種の「ヘーゲル弁証法の唯物論的同好会」にならなければならない〔1922「戦闘的唯物論の意義について」、全集、第33巻、234ページ〕と、かの修行を勧告していた。もちろんレーニンのことだから、若き日にヘーゲル弁証法を研究した『哲学ノート』が明らかにしているように、彼が奨励しているのは内在的、歴史的、および総体的な弁証法の研鑽であって、間違っても決してその悟性的解釈ではないのである。

25) このパラグラフはエンゲルス 1878『反デューリング論』、全集、第20巻、261（原）ページから補充した。なおこの部分は、エンゲルス 1882『空想から科学へ』、全集、第19巻、223（原）ページに活用されている。

26) これらのパラグラフはエンゲルス『自然の弁証法』、全集、第20巻、324（原）ページから補充した。

後記

1) S・L・ウォシュバーンは動物学レベルにおいて、ヒト化にはいわゆる「二回の移動様式革命」が必要だったと説き、一回目の飛躍は食虫目の一部が樹上へ上ってサル化していったことだとした。だから逆の地上進出は二回目の飛躍だったわけで、ヒト化にとってはブラキエーションを

も含め、樹上で発達した生活諸様式には副次的な意義しか認められない。かくして二回目における木登り垂直攀縁動作は、ヒト化の決定的な第一歩に繋がったのである。

- 2) 増田俊男『ブッシュよ、お前もか...』,(風雲舎,2001年),参照。
- 3) 同上,144ページ。
- 4) レーニン 1917「競争をどう組織するか?」,全集,第26巻,415ページ。
- 5) 牧野紀之『ヘーゲルからレーニンへ』,(鶏鳴出版,1979年),239ページ。
- 6) 関口存男『ドイツ語学講話』,(三修社,1975年),261ページ。
- 7) 許萬元「ヘーゲルにおける概念的把握の論理」,『哲学誌』第7号,(都立大学哲学研究室,1964年),90-1ページ。
- 8) 宮本武蔵『五輪書』,(岩波書店,1985年),75ページ。

Immanent Dialectic in 'The Part Played by Labour in the Transition from Ape to Man'. (3)

SUDO Yasuhide *

Abstract: This study elucidates the logic of the section on reason or conceptualism in 'The Part Played by Labour in the Transition from Ape to Man' by F. Engels. In its content, he epistemologically examined isolated results of the study on evolution in connection with the development of purpose, and logically explicated that investigation. My research examines the reason or conceptualism in the dialectical categories and is divided into three parts: the observing reason, or the subjective concept, the acting reason, or the objectivity, and living reason as a member of society, or the idea.

Keywords: observing reason, universal interaction, purposiveness, acting reason, sense of purpose, social living reason, foretell the future of man

* Professor of the Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University